

XII フェアプレイ精神を育む体育授業（平成28年度の取り組みより）

XII-1. 小学校（眞榮里）

授業者：眞榮里耕太 学習者：小学校2部3年28名（男子13名・女子15名）

1. 小学校におけるフェアプレイについて

「運動・スポーツに取り組んでいれば自然とフェアプレイを学ぶことができる」と思われているがそうはいかない。教師が学習課題として意図的に取り上げなければならない。

トップアスリートをはじめとした大人でも、様々な理由からドーピング等の不正行為を犯してしまうことがある。「フェア」でなければならないと分かっているにもかかわらず、後を絶たない非常に難しい問題である。ましてや小学生となると負けず嫌いや1番を好む子が多数いる。何とかして自分の思いを達成しようとする。そのため、小学生には、フェアであるべきことを実感を伴って理解させ、さらに行動へとつなげていきたい。

学習指導要領の中にも社会性の目標が以前から掲げられている。決して新しい目標ではない。技能面だけではなく態度面の成長も体育科の学習成果として期待されている。

具体的な姿としては「ルールを守る」「勝敗・判定を受け入れる」といったルールに対することや「仲間を応援する・励ます・認める」「相手の気持ちを思いやる」「仲間の運動を助ける」といった仲間とかわることと「全力で最後まで取り組む」という個人の取り組み方であると考えている。

2. 活動計画

○長なわ2人とび20分×6回程度（本時は5回目）

本時の位置づけ

なわを大きくゆっくり回すことを意識させる。とぶ子は2人で手をつないでタイミングを合わせてとび、すばやく並ぶ位置に戻る。

引っかかりたり、なわ回しが上手くいかない場合にも責めることなく次につなげられるような声をかける。

○コーンぶつけ

パスをつないでシュート・・・20分×4回

守りのいないスペースに動く・・・20分×4回（本時は1回目）

本時の位置づけ

技能面では、守りのいない所からシュートをさせたい。空いたスペースに回り込み、素速くパスをつなぐことを意識させる。

試合を重ねていく内に勝敗に対するこだわりが出てくる。一つのミスで勝敗を左右することになる。ミスした仲間や動き方が分からない仲間に対して肯定的な声かけをさせていきたい。

3. 公開授業について

長なわ2人とびでは、互いのグループを観察することでなわに引っかけた際に失敗の原因を分析し、アドバイスするようにさせた。授業の中では、2人とびの新記録を出すことができた。

コーンぶつけでは守りが「ボールを遠くにはじく」ことが認められた。ゲーム中は公正に判定をしながら取り組むことができた。また、トラブルになりそうな場合にはじゃんけんすることで解決していた。

Ⅺ－２．中学校（長岡）

授業者：長岡 樹 学習者：中学校2年5組男女41名（男子21名・女子20名）

単元名：体育理論 オリンピック・パラリンピック単元

1. 本単元の捉え方

オリンピック・パラリンピックそのものやオリンピック・パラリンピックを通じた学びは、体育理論の学習内容を理解するのに適している内容も数多くあると考えている。

なぜ理解するのに適しているのだろうか。チャレンジすることやルールを守りフェアにプレイする理念、多様性を尊重する態度といったスポーツの価値や意義について、オリンピック・パラリンピックからそれらを学びやすいといえる。話題性に富んでいてしかも影響力がある。生徒にとって興味関心が高く、結果として学ぶ内容を理解させやすいと考えるからである。また、私たちは、日常における身近な運動・スポーツ活動や体育行事の場面といった自分たちの体験をオリンピック・パラリンピックで見られる光景や選手の姿と重ね合わせて振り返ったり、また目標としたりする。そのため、スポーツの価値や意義について、体験を通してすでに理解していることが多く、体育理論で学ぶ知識を習得させやすいと考えている。

2. 単元計画

- (1) 古代オリンピックと近代オリンピック (2) 近代オリンピックの課題や問題点、パラリンピック
- (3) フェアプレイ（※公開授業） (4) パラリンピック競技の体験
- (5) パラリンピック競技の用具やルールの工夫を調べる (6) パフォーマンスを支える科学

3. 公開授業の概要

本時のねらいを以下のとおりとして、授業を展開した。

- (1) フェアプレイとは何かについて、「ルール」・「相手」・「自分」の視点から理解する。
- (2) フェアプレイの理解を通して、スポーツの文化的意義を共生の視点から見つめられる。
- (3) フェアプレイやスポーツの価値について考え、日常生活においても活用できる視野を持てる。

教材としては、①選手宣誓、②古代オリンピック、③本校運動会の練習時に発生した事件、④フェアプレイの事例、⑤名言を活用した。

まず、フェアプレイについて考える導入として、選手宣誓と古代オリンピックの古代オリンピック時代の短距離走に使用されていたスタート装置（ヒュスプレクス）を題材とした。選手宣誓は、フェアプレイの要素が詰まっている。生徒が考えた選手宣誓を活用し、フェアプレイとは何かについて考えさせた。ヒュスプレクスは、全競技者に公正なスタートをさせるための装置である。

次に、運動会練習時に発生した事件を通して、『ルールをつくることや守ること』など、フェアとは何かについて理解する場をつくった。本学習では、フェアを①ルールの遵守、②競争相手に機会均等と競技開始時の同権を保障する理念、③相手を尊重する、④審判を尊重する、こととして学習を進めた。さらに、『ルールを変える』ことについて、共生の視点で考える機会を設けた。

フェアプレイの事例では、国際フェアプレイ賞や社会の取り組みも紹介した。また、行動としてのフェアプレイは目に見えて理解しやすいが、行動として見えにくい心の面としてのフェアプレイの精神について考えさせた。

最後に名言（『参加することに意義がある』、『精力善用・自他共栄』）を紹介した。そして、これまでを振り返り、今後の日常生活でどのような場面でいかしていきたいのか考えさせて、まとめとした。

XII-3. 高等学校（鮫島）

授業者：鮫島康太 学習者：2年4組、5組 男子生徒39名

単元名 柔道

1. 本単元の概要

武道は日本の伝統的な身体文化であり、その特性は他の球技スポーツとは異なる特性を持っている。柔道は、柔道衣のみを着用し相手と直接組み合い攻防する「接触競技」であり、投げられた時の衝撃や抑え込まれた時の圧迫感は、日常生活で経験しにくいものである。それらは生徒に新鮮な刺激となりうるが、格闘的側面により怪我などの安全面への影響も考慮しなければならない。創始者である嘉納治五郎が唱えた「精力善用」「自他共栄」の理念は、柔道を学ぶ中で、互いに協力し、助け合い、譲り合い、それによって自他共に向上することで社会の発展に役立つ人材に成長することと考えられている。これらのことは、他のスポーツでフェアプレイ精神と共通することでもあろう。

2. 公開授業概要

1) 位置づけとねらい

本時は、13時間中の6時間目で、昨年の復習も終わり柔道特有の感覚が馴染んできた頃である。気温が低い時期の授業となった。そのため、これまではウォーミングアップも兼ねて固め技の指導に入り、そのまま技能の解説行うことが多い。しかし、本時は投げ技の既習技を用いて約束練習から自由練習に近づけていく時間であるため、留意点と解説が多くなる。そのため、投げ技に重きを置く授業となる。本時の内容は「三様の稽古」と「見取り稽古」を用いた自由練習の導入である。この4つの稽古方法の実践を通して、生徒自身が上達するためにはどうすれば良いかを考え、更には他者へアドバイスすることができるようになれば「精力善用」「自他共栄」の理解につながる。

2) 本時の目標

- ・礼法や柔道着の着方などの所作を大切にする
- ・既習の受け身の習熟と応用
- ・三様の稽古+見取り稽古を理解し実践する

3) 授業展開

0～10 … 整列・点呼・ウォーミングアップ

- ・袈裟固めの返し方「鉄砲返し」、ストレッチ、腕立て伏せ50回、回転運動

11～15 … 固め技自由練習

- ・背中合わせ、引き込みの姿勢、腹這いの姿勢、添い寝状態からスタート

16～24 … 投げ技のかかり練習と約束練習

- ・膝車、体落とし、大腰、小内刈り、大内刈り

25～45 … 三様の稽古と見取り稽古の解説、自由練習

- ・五角稽古、引き立て稽古、捨て稽古と見取り稽古の解説
- ・12分間、自由に時間を決め、自分で相手を探しお願いする自由練習。

46～50 … まとめ